

国をいかに調べるか

聖徳大学 高橋伸夫



1 はじめに

本誌の前々号で田部俊充氏が「身近な地域」の調査方法について執筆し、前号では村山朝子氏が「都道府県単位」を対象として調査する方法を示した。新教育課程は、地域の規模に応じた調査を行い、その際、学び方を学ぶ学習も要求している。

従来、市町村、都道府県、そして国という単位を対象として、生徒はいかに学び、それに対して教師や教科書が十分に伝えてきたとは思えない。学会での所産としては、いくつか代表的なものが存在する。しかし、学校教育で最重要な分野でありながら、十分な検討によってスケール学習に対応した小・中・高校における段階的でしかもミニマムな記述、そして習得方法は確立されてこなかった。

ひるがえって、ある市域や一つの県、ましてやある外国の国を中学生が調べることは、実際にはきわめて困難な教育の課題であるし、重要な単元でもある。小文は、外国の一国を中学生が調べるには、いかにしたらよいか、試論も含めつつ調べてみたい。

2 どうして中国・アメリカ合衆国・ドイツか

身近な地域や現地観察ができる地域の範囲に対しては、調査対象地域や調べるときの視点も考察が容易である。しかし、外国の場合には現地に行けないことが前提となる。そして、約192の国の中から3か国のみを事例として学習する。事例学習となると、どうしても大国が選ばれるという危惧は残るが。

中学校の教科書では、中国・アメリカ合衆国・ドイツが選ばれた。中国は、日本の隣国であり、日本はその歴史に影響を受けてきた。さらに、教育課程審議会

の答申にもあるように、アジア諸国の教育が促進されていることも無視できない。

日本はアメリカ合衆国とは、政治的・経済的に結びついているのみならず、自動車化、商業の形態、さらには大衆文化にいたるまで影響を受けている。

一方、ヨーロッパでは、欧州連合（EU）の組織ができあがり、共通通貨も使用されている。ドイツはその一つであり、今後、EUの中心国としての役割を強化してゆくことであろう。

3 国を捉える視点

身近な地域の場合、教科書はおもな資料として入手先や聞き取り調査のマナーと質問事項の例など、具体的に調査の方法、入手できる資料例などを生徒に示している。都道府県を調べるときも、

3章 世界の国々を調べよう

中国はとなりの国で、歴史にも何度も出てきてるけど、国のようすはよくわからないなあ。

① 水運通のような道の難を通る観光船（中国、コイリン）

② 古い家が残るドイツの町なみ（フランクフルト）

③ 遠くはなれた国のことなのに、どうやって調べを手に入れるのかなあ。

世界の国を調べるのは、県を調べるのと同じ方法でできるのかな。

④ ロデオ（アメリカ合衆国、アイダホ州） あばれ馬や牛を乗りこなすやぶを競います。

おもな視点	
中国	人口(総数、分布、構成) 生活・文化(宗教、言語、民族) 資源産業(農業、資源、工業)
合衆国	生活・文化(移民、民族構成、生活のようす) 資源産業(大規模農業、先端産業)
ドイツ	結びつき(国境、交通網、政治的・経済的結びつき) 生活・文化(環境問題、宗教、伝統文化)

④ ⑤ ⑥ 三つの国調べとくに注目した視点 p.129にある視点も参考にしました。

これから、世界の国々を調べていきましょう。国調べはいままで学んだ県調べとほぼ同じ調べ方でのいいのですが、④⑤に示した国境・民族・宗教・貿易などのように、国調べにならばじめて出てくる視点があります。使う資料もちがってきます。

ここでは、中国、アメリカ合衆国、ドイツの三つの国を、それぞれちがった方法で調べた例が示されています。中国では、統計資料を手がかりに、国内の地域によるちがいに注目して国を調べます。アメリカ合衆国では、自由に集めた資料を手がかりに、他の国との結びつきに注目して国を調べます。ドイツでは、地図帳を手がかりに、まわりの国との協力関係に注目して、国を調べます。これらの例をあなたの国調べに役立てましょう。

自然環境・人口・産業・地域間統合そして生活・文化の5項目をあげて、視点の例までも表にしてある。

しかし、国単位となって、三つの国調べにいたると、特に注目した視点のみに気づく。「生活・文化」の項目を共通点として、他の視点で類似する項目がない。教科書では、その国の特色をより鮮明にするために、前掲の3か国をそれぞれ異なった視点で調べた例を示している。たとえば、中国は統計資料を手がかりに、国内の地域による差異に注目している。アメリカ合衆国では、自由に集めた資料を手がかりに、他国との結びつきに注目している。そして、ドイツでは、地図帳を手がかりに、周辺国との協力関係に注目して調査してあると本文中に記されている。当然、国調べに際しては、多面的・複眼的にその国を調べなくてはならないが、それには常に資料の制約がつきまとう。

したがって、教師の生徒に対する手助けは他のスケール以上のものが望まれる。

日本では、あまり登場しなかった人種・民族・宗教・国家間の貿易や経済交流などの視点が必要になる。さらに、ある特定国を調べてもその上位にある組織、たとえば、ドイツに対してEUのように、広域的な組織の中の位置づけや、ひいては世界の中のその国がはたしている役割などは調べなくてはならないであろう。

その国の自然環境を考えた場合、起伏や南北差に大きな差異があるときには、自然条件と土地利用との関連から生じるところの地域的多様性も十分考察したい。外国の統計や資料のために、大使館や他にインターネットを活用することもあろう。

ときには、旅行記、物語、旅行ガイドも利用できるが、それぞれ目的があるために、点的情報のみを探ることなく面的情報を得ねばならない。

ある国を選択する動機となる日本との結びつきに関しては、歴史をふまえつつ、考察を深めたい。

4 いかにかまとめるか

長い時間をかけた国調べをいかにかまとめるかも重要な論点である。

教科書では、中国に関しては、地図を用いてまとめた。自然環境、人口、おもな農作物、工業の

4枚の地図にそれを重ねあわせた地図を中心として、簡単な説明がくわえられている。アメリカ合衆国では、パソコンを使ってまとめてある。目次は人々の生活、農業、工業などであり、パソコンを使うと、写真や図版のほかに、動画や音声など、さまざまな要素を盛り込むことができる。ドイツの場合には、新聞という形式でまとめてある。新聞は、文字が中心になるので、紙面が見やすいこと、書いた人の考えが、読者に正確に伝わることなどである。

社説やコラム欄を設けて内容の性格を変えることも可能である。

5 結論をもう一步深められないか

国調べの学習に関して、危惧するのは、さまざまな資料をたとえ収集できたとしても、その中から「結論」を生徒自身が導きうるかという点である。その能力の低下を感じとってか、新教育課程では「学び方を学ぶ」が強調された。受け身の学習に慣れてきた生徒が問題にしているような多量の情報から概念化を進めるような思考が容易にできるとは思われない。したがって、国調べの際には、教師の主導力の強化が不可欠と考えている。

上記の論議は、続けたいがかぎられた紙面ゆえ許されないので別項にゆずりたい。

国調べに際しては、要は、教師が仮説か自分自身のその国に関する国土基本構造を簡潔でよから描ける必要があると思う。

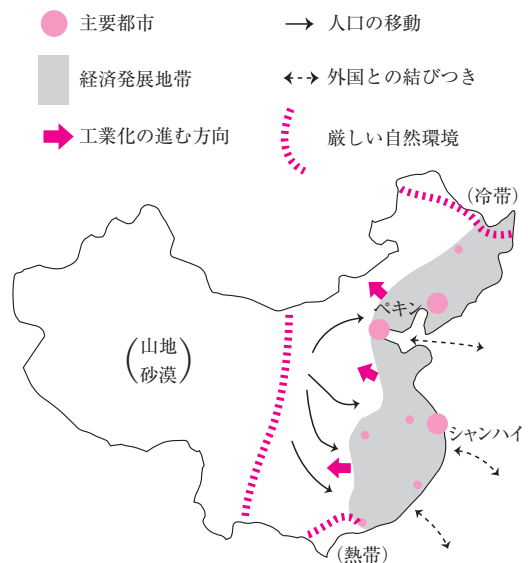


図1 中国の国土基本図(筆者原図)

R. ブリュンネ他は、『世界地誌10巻』を編集する以前に、国や地方の地域構造を抽出する際の基礎的要素を定めた。その結果、世界すべての国にはいたらなかったが、国土や地方の基本的地域構造を1枚の地図に描いた。本文では、筆者が教科書のまとめ図を参考にしつつ中国を対象に、そ

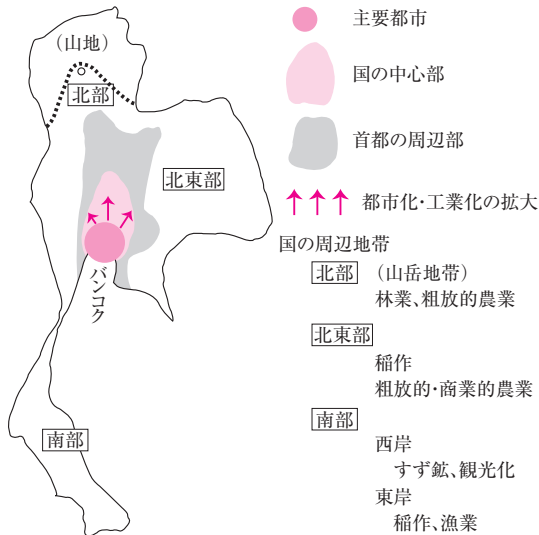


図2 タイの国土基本図(R.ブリュンネ他原図を一部修正)

の近隣国のタイはブリュンネ・グループのモデルに基づきながら作成してみた。そしてドイツの隣国としてブリュンネが自国を自身で描いたものをきわめて単純に表現してみた。アメリカ合衆国とは同じアメリカ大陸の南側に位置するブラジルの事例を取り上げてみた。

この国土基本構造図をならべてみると、描く人によって、国土の基本的要素が異なるものの、国の諸機能が特定の都市に集中しているのが、まずタイ。一方、先進国でありながらフランスはパリ一極集中型であり、パリがフランス国土の骨格を形成するほどである。ブラジルと中国は、植民の過去に形成された特定な少数都市の発展から他の都市も成長する多核化が進行し、しかも両国ともに内陸部への開発の課題をかかえている。

R. ブリュンネ・グループの国土基本構造図は経済活動を強調しすぎることや生活・文化についても欠落があるなどの批判がある。しかし、国調べのまとめの際には、役立つ点が多いと思われる。少なくとも、これらの図が生徒に対してその国の特性をイメージとして把握する手助けになればと念じている。

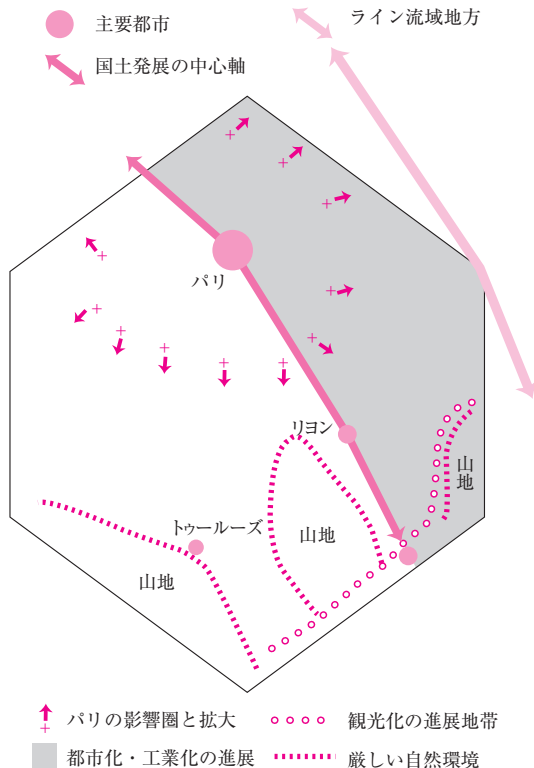


図3 フランスの国土基本図(R.ブリュンネ原図を修正)

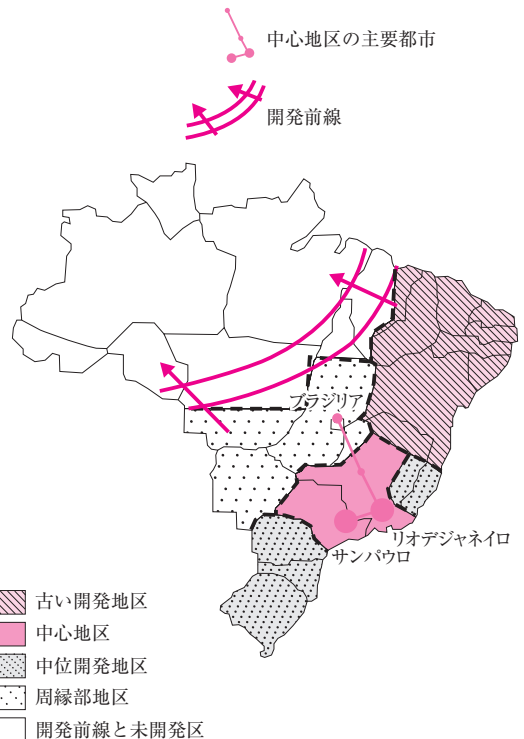


図4 ブラジルの国土基本図(J.テリー原図を一部修正)